

と一緒ではなかった。満人に誘われて、Tちゃんとその家でひと晩泊まったまま行方不明になってしまった。そのことで、Tちゃんの両親兄弟にいろいろと詰問され恨まれて、母と共に気まずい思いをしたが、数多い引揚者の間では、誤解をも交えていろいろな問題が起こった。これは宿命的なことであり、生涯にわたって耐えて暮らさなければならぬと覚悟をしている。

今は何も迷うことはなく、今八十三歳だが、一応の目標は百歳を悠々と笑って迎えようと、無念無想の境地で空を眺めている。最後に、私を生んでくれた母を慕い、そしてその基礎を作ってくれた父に感謝するのみである。

ある大陸二世の記録

千葉県 大和田 義 明

一 両親は朝鮮で家庭を持つ

父朝吉は、福島県箕輪村（現いわき市）の農家の出身で、日露戦争が終わった翌年、仙台の連隊に現役入隊したが、満期除隊を前に憲兵を志願し、なおかつ外地勤務を希望して日韓併合直後の朝鮮へ渡った。

渡航前に、選ばれて仙台で經理の短期講習を受け、また結婚を勧められて、慌ただしく妻帯することとなった。仲人の世話になり、福島県須賀川町の医師、角田午之助の末娘ツキと祝言をあげた。朝鮮で所帯を持った両親は七人の子をもうけたが、私はその末っ子として昭和四（一九二九）年に義州の警察官舎で出生した。私が四歳のころ、父は警察官を退職して、鴨緑江沿いの少し上流にある昌城という町に移り、旅館を経営していたが、下

流の水豊という地点に水力発電所が建設されることになり、昌城は湖底に沈んでしまおうという話になった。一家は、知人の世話で満州の安東（丹東）へ引越すこととなった。

二 満州での生活開始

源流の白頭山を発した鴨緑江は、朝鮮と満州との境を流れて八百キロメートル、その最下流に位置するのが安東市である。下流に広がる原野を整地して、日本人が新市街を形成したので。

満鉄の都市計画で造られた街は、横の通りを一
番通・二番通・三番通と呼んでいた。縦の通りは
一丁目・二丁目・三丁目というふうに整然と碁盤
の目を刻んでいた。とりあえず住むことになった
家は、日本人居住地の一番外れの方に在った。家
のそばの広い通りを境目に、中国人たちが居住す
る街中に一步入ると、見かける人たちはなんと真
っ黒の衣服をまとい、昨日まで朝鮮の町で
見慣れている真っ白のだぶだぶの衣裳と比べると、
あまりの対照的な風景に驚かされた。

昭和十一年九月、転入学したのは、安東大和尋常小学校といい、今までに見たこともない大きな学校だった。満鉄が造った学校だから、設備は実にすばらしいものだった。そして何よりも、優秀な教員が日本各地から集められ、充実した授業が行われていた。

三 安東中学校に入学

昭和十七年四月に、安東中学校に入学した。入学当初は、A B C Dの四クラスに分けられた。日米は開戦し英語は敵性語とされたが、そのころはまだ英語の授業は毎日あった。

しかし、二年生に進級したころから、授業は様変わりしていくのだった。軍事教練の時間はどんどん増えてゆき、生活の周辺のすべての面で戦時色が濃厚となり、学徒動員も若年化して、三年生からはもはや通学することもなく、もっぱら勤労動員に明け暮れていった。

三年生の夏、一カ月の間、北満州の開拓団に援農作業に派遣された。チチハルから支線をしばら

く走り、老菜で降りた。そこには福島県から入植した「大和村開拓団」があった。我々が宿泊することになったのは、その開拓団の中の「三春」という部落で、なだらかな丘の斜面に煉瓦づくりの農家が六戸ばかり建っていて、その中の空き家になつていた一戸に、五人の同級生があてがわれた。

この部落の農家は、どの家も母子家庭だった。家長である男性は、みな現地召集で部隊にとられて、主たる働き手を失つた状態では、大陸式の大規模農業を維持することはできなかった。開拓団では、八月中働いて安東へ帰った。

二学期からは、教科書を開いて勉強するなどという時間はほとんどなくなった。六道溝にある、牡丹江木材という会社の造船所に動員されて、班ごとに船台に着いて、木造船を造った。

昭和二十年四年生になつて、最高学年としての気分を味わう間もなく、遼陽郊外にあった東洋一というふれこみの火薬工場に派遣され、黄色火薬を製造する部門に配属された。

四 敗戦を迎える

八月十五日、火薬工場本部前の広場に全員が集められ、整列して終戦の詔勅を聞いた。非常に分りにくいものだったが、戦争を終わらせると言うことだけは分かった。

我々少年に、深い洞察力なんぞのあるわけはなく、宿舎に戻つてからはとりとめのない話が続いた。そうした中、朝鮮人の生徒たちは皆うきうきとしていて、我々日本人生徒とははっきり違つていた。そのような雰囲気の中で、金山君がどこで聞いてきたのか、「八月十九日にソ連軍が進駐して、この工場は解放される」と言うのだった。彼の言う「解放される」という言葉には何か意味があるらしかったが、金山君たちがその言葉を使うにふさわしいと分かるまでには、少し時間を要した。

引率者の安藤先生の決断で、即刻、安東に帰ることになったが、遼宮線の寒嶺駅までかなりの長い距離を歩かなければならない。本溪湖女学校の

三年生一クラスを宮原まで送ることになり、四列縦隊の中の二列に女学生を挟んで、その外側を中學生が守りながら歩くという隊伍を組んで、緊張の中に出発した。安藤先生の命令で、柔道部員は最後尾についた。

第一回の襲撃を、出発後間もなくの草原で受けた。真つ暗闇の中に暴徒が迫って来て、少し隊列が乱れたところを狙われた。暴徒は、遅れがちな女學生たちに寄つてたかつて強奪を始めたのである。安藤先生が「毛布を捨てろ」と大声で指示されたので、何人かの生徒が毛布を投げ飛ばしたところ、暴徒は毛布の奪い合いとなり、一難は去つた。

次に通つた村落の中の道は、不気味だった。鬱蒼と茂つた大木が連なっているその道を、隊列の最後がもう少しでそこを通過し終わろうとしていたときに、突然、石塊が降つてきて、かなりの被害者が出た。見ると、両側の塀の上には鈴なりになつた中国人の頭が並んでいた。つづての一斉射撃

だった。彼らの戦法は、ゲリラ戦に長けるやり方だった。私は右の頬に石が当たり出血がひどく、シャツは赤く染まってしまった。

みんなは黙々と歩いた。太子河の畔にたどり着き、夜の明けるのを待った。うつらうつらしながら朝を迎えた。深い霧がたちこめる中に、我々の周囲をぐるりと取り囲んで、うさん臭い目付きをした中国人たちが大勢立っていた。

安藤先生は伝令を走らせ、大声で指示を伝えた。暴徒には、弱いところを見せてはいけないというのだった。そのとき、生徒は全員木刀を手にしていた。

渡し場での船頭との交渉には手間取つた。通常の渡し賃の何倍もふっかけられ、二艘の丸木舟で全員が渡り終えるのには、随分時間を要した。川から寒嶺駅までは近かつた。駅でしばらく待つと、貨物列車が入ってきたが、幸い機関手は日本人だった。事情を話して、バラ積み of 石炭車の上に乗せてもらった。いくつかのトンネルをくぐつたの

で、みんなは顔を真っ黒にして宮原駅に着いた。

宮原駅の構内で女学生と中学生が向かい合つて整列し、簡単なお別れ式をやった。

安奉線の列車はうまく確保でき、途中では何事もなく安東駅に着いた。駅頭に立ったとき、まず目に入ったものは、安東ホテルの正面玄関にひるがえっている赤旗だった。安東は占領されたという、象徴的な感じを強く受けた。駅前広場に整列して解散式が行われたあと、三々五々と家路についた。何の前触れもなく帰った私の顔を見て、両親は安堵した。そのときに、父は「間もなくソ連軍が進駐するだろう。終戦といつてはいるが、関東軍が武装解除されたあととは、何も抵抗するものはないから、赤子の手をひねるようなものだ。実態は敗戦だ。想像を超えたひどいことになるぞ?」と言つて天を仰いでいた。

五 ソ連軍の進駐

ほとんど日本軍の抵抗を受けずに、ソ連軍は全満州の主要都市を制圧した。安東市へは、八月十

九日にソ連軍政治部將校を長とする先遣隊が入つて来て、市内の状況を確認した上で、翌々日の二十一日にはパルスコフ中將が正式に進駐した。そのときには、中国人や朝鮮人のほか、日本人の男子も安東駅前に整列して出迎えていた。安東市におけるソ連軍進駐部隊は、駐屯司令官カリニューヒン少佐の下に、將校七十人、兵約百三十人で、司令部を駅前の安東ホテルに置き、安東高等女学校を將校宿舎に、安東中学校を兵の宿舎として接收した。

九月中旬には、工場施設等の撤去部隊として約千人が到着して、安東市周辺の各種工場施設を調査する一方で、我々日本人を使役として、名のあがる工場から、据え付けてある各種の機械をことごとく接收した。かき集めた貨車にそれら収奪した物資を詰め込んで、一路本国へ運び去り、最後には複線であった鉄道線路の下り線のレールまでも外して、貨車にバラ積みして持ち去つたのである。さらに占領間には、ソ連兵による民家への押し入

り、略奪、暴行の事件は、昼夜を問わずに発生し、悪辣の極みであった。しばらくはそのような情勢が続いていたが、遂次ソ連軍は南下して、十二月になるとソ連軍最後の部隊が鴨緑江鉄橋を渡り、占領下の北朝鮮へ移動した。そのあとに、国内共戦が当地でも本格化していった。

六 日本の教科書を北朝鮮学校で使用

この年の十一月のある日のこと、八月まで中学校で同級生だった、朝鮮人の金山君が突然我が家を訪ねて来て、「姉さんがギターを持っていて聞いてきた。そのギターを売ってくれ」と言うのだった。何やら制服らしきものを着用していて、「遼東人民解放軍」と書かれた腕章をつけていた。逆らわない方がよいと思い、ギターを彼にプレゼントした。十二月に入ったある日、金山君が再び現れて、今度は「中学校で使用していた物理・化学・代数・幾何などの教科書を買集めて欲しい。定価の十倍で買う。なんぼあっても良い。多ければ多いほど良いから」と言うのだった。このとき

も、彼らに対しては、できるだけ従順にしていた方がよいと判断して、積極的に協力した。佐藤啓、平田昭、山口享、静間四郎の諸君は、抱えきれないほどたくさんの教科書を集めて来てくれた。

朝鮮から仕入のためにやってきた鄭さんという人は、新義州商業高校の卒業生だそうだ。「今は混乱期で何も作れない。日本の中学校の教科書は、レベルが高い。我が国の学校では、教師も生徒も皆日本語をよく理解できる」と言うのだった。

七 五番通り事件

昭和二十一年一月当時の安東市は、中国共産軍の支配下にあつたが、中国共産軍の日僑工作班長劉氏が、五番通りで射殺された。暗殺団が潜伏していたと思われた五番通りの居住者五百家族、約二千人は、強制的に立退きを命ぜられた。いったん、協和会館に收容されたのちに、男性の大部分は東坎子の監獄へ連行されて、取り調べを受けた。女、子供は六道溝の旧競馬場跡地の倉庫などへ移り、四日間監禁された。ときはちょうど酷寒の折

でもあり、乳幼児など二十五人ほどの死亡が確認された。

八 我が家の状況

一月十七日午後、何の前触れもなく大勢の八路軍兵士が踏み込んで来た。銃口を突き付けて威嚇し、「出ろー」「早く出ろー」と怒鳴るのだが、何が何だかわからない。「ちよつと待ってくれー」と、母が手を合わせて拝みながら言うのと、兵士は仕方がないというような顔をした。このとき、家族の中では母がいちばん腹がすわっていた。タンスの引き出しから大方のものをリュックサックに詰め終えてから、「ありがとうー」と一言母は言った。二人の姉は、それぞれリュックサックを背負い、私は喘息で臥せていた父をおぶり、帯でしつかり縛り付けて表へ出た。「早く行け！」と、しきりに追い立てる兵士の声が迫ってくる。指揮官は、五番通りの大通りの方へ集合するように指示しているようだ。私は指揮官に直訴した。「父は病気だから、この先の兄の家へ行ってもいいか？」と必死

に叫んだところ、痩せ衰えた病人を背負った私の姿をちらつと見て、「よし、行け！」という声が返ってきた。「地獄で仏」とは、こういう場合を言うのか。座卓をひっくり返して櫂の代用にして、そこに父を座らせて紐を結んで、一息に引っ張って出た。市場通り、四番通り、三番通り、二番通りと、櫂を引いて一気に駆け抜けたのだった。

九 父の死

この五番通り事件をきっかけとして、喘息持ちの父の病勢はますます悪化してしまい、この年の六月七日、六十一歳の生涯を終えたのである。この間、中国人の馬車屋の大高子などは、親身になって父をかばってくれた。夜間に隠れるようにして、たびたび見舞ってくれたし、お別れときには本当に涙を流して別れを惜しんでくれた。

もちろん、父の経歴は中国人も朝鮮人も皆知っていた。植民地時代の職業によっては、恐怖の毎日を過ごさなければならぬときに、父は普通の人として、人民裁判とは無縁であった。病を得た

とはいえ、結局畳の上で生涯を閉じることができたのであった。

十 八路軍担架隊要員に徴用

ソ連軍の侵入に続き、中国の軍隊として先に満州へ入って来たのは中国共産軍だった。国共内戦が激しくなる中で、中国共産軍は日本人劳工、看護婦要員の徴用を開始した。はじめは希望者を募っていたりしたが、戦闘激化に伴い、二十一年の三月ごろからは次第に強制的になってきた。男子の場合は、まず難民の中に多くいた旧日本軍の除隊兵をかき集めて、前線へ連行して行った。仕事は塹壕掘りの作業や、担架隊要員だが逃亡する者が多く、補充要員として除隊兵以外の未婚の青年も駆り出されるようになった。

八路軍の兵士が二人、街公処にいる民主連盟の男と一緒に我が家へやって来て、私の名前を呼び上げ、いきなり連行されて駅前の広場に集められた。除隊兵のグループと一緒に貨車に詰め込まれて、前線へ送られた。安奉線の草河口駅で降ろさ

れ、塹壕掘りの人夫と担架隊要員に分けられた。

私は、担架隊の方に選別された。皆二人組に編成され、私は宗像と名乗る旧陸軍軍曹殿とコンビを組まされた。まるで廃屋のような感じの建物に、一部屋に六人ずつあてがわれ、床に直接横たわって寝た。翌日は、いきなり出勤することになった。通訳にあたっていた人は、八路軍の軍服を着ているが日本人のようだった。「これから緩衝地帯に入るが、前夜の戦闘で負傷した兵士が、塹壕に退避している。その現場から負傷兵を救出して、後方の野戦病院まで運んでもらいたい」という内容の話だった。明けて二日目は、徒歩で山を越えるつらい行程だったが、夕刻、早めに腹ごしらえしてから休息に入った。これから戦場の真ただ中に身を進めるということは、想像できる世界ではなく、ただ恐ろしいことだった。

深夜を待って、一列縦隊で肅々と歩いた。目的地の塹壕に到着すると、負傷兵が大勢横たわっていた。連長の指示で負傷兵を担架に乗せ、紐で固

定した。私は前棒で宗像さんが後棒となった。順番に今来た方向へ進んで行き、途中何のこともなく過ぎようとしたが、山間の中間地点に差し掛かったときに、にわかには敵の銃撃が始まったのである。私は足がすくんで動けず、腰をおろしてしまった。宗像さんが小声で叱っていた。「弾は音だけだ！十メートルも、二十メートルも上を通り過ぎていただけ。絶対に当たらない！このままここで停止していると、今度は照準が合ってくるんだ。とにかく歩け！」と、はっぱをかけられた。気合をいれて、谷間を抜けて平場に入った地点で、今度はさつきとは全く違う感じの銃撃が始まった。宗像さんが「これはだめだ、伏せろ！」と叫んだ。負傷兵を担架に乗せたまま、凹地へ飛び込んで伏せた。「今度の弾は砂に突き刺さっているだろう。この弾は当たるんだよ。絶対に動くな」と、怒鳴って言った。激しい銃撃を受けながら「いやだ！こんな所で死ぬのはいやだ！」と思った。そばを見ると負傷者の出血がひどいので、白布で大腿部

を縛り上げた。負傷者はなかなか気丈な男で、「俺は大丈夫！」だとか何とか言っている。待ち伏せ攻撃だから、いっどこから弾が飛んでくるか全く分からない。銃撃が収まるまで待っていて、今がチャンスとその場を逃げ出した。山かげを回った所で衛生兵に負傷兵を渡して、その日の仕事は終わった。担架隊に強制連行されたのは、全員日本人である。実弾の飛び交う戦線で、この強制労働におとなしく従事した人たちの心境はどうだっただろうか。このとき私は「なんで中国軍同士の覇権争いの戦争に動員されて、命懸けで働かなくてはならないのか？こんな間尺に合わないことはない」と思った。

翌朝、集会所で王という将校が挨拶した。「今回、あなたがたは一人も逃亡しなかった。多くの人命が救助されたことに感謝する。この班は特別に任務を解除する」と言った。我々は解放されたのだ。つた。

十一 二回目の徴用そして脱走

七月二十日、三番通りの街公処から、また召集状を持った八路軍の兵士が二人やって来た。同行していた通訳の民主連盟の男に、「劳工には、この間行つたばかりだ！」と抗議したが、あとで話を聞くということで、一応集合場所の駅前へ行つてみた。同級生の万世茂憲君や、下級生の大成哲夫君の顔を見つけて、ほっとした。仲間がいると心丈夫なもので、結局一緒に引かれて行くことになった。

安奉線の劉家河駅で降ろされ、赤煉瓦の元満鉄官舎に分散して入れられた。翌日は、一日中、早稲田大学へ留学したという王幹部の講義を聞いた。三日目の昼食後、同室の五人がそろつたときに、万世君がリュックサックの底から引揚証明書を出して見せた。これがあれば、検問所を通過できるということだった。もつともらしい形式と内容のものだったが、どう見ても偽物のようだった。しかし、私はこの話に乗った。新京法政大学の学生だという栗和田氏が、仲間に加えて欲しいと申し

出た。大成君は、安東へ帰つて家族と一緒に行動するということで、脱走は結局、万世、栗和田、それに私の三人で翌朝決行と決まった。

七月二十三日の朝四時過ぎ、窓から屋外へ出て、東の方角の鉄条網をくぐり抜けて逃げた。早朝のため、劉家河の鉄橋には歩哨が立っていない。林家台の村落を近くに見ながら、黙々と鉄道沿線を歩いた。どの検問所も、うまく通過できた。内心びくびくして、そんなにうまくゆくとはい思つていなかったが、第一日はだいたい予定の行程を進むことができた。通遠堡、草河口を過ぎ、祁家堡の駅に着いたときには、もう夕暮れが迫っていた。祁家堡には、日本人駅員の小寺六三さんが家族と共に残留していた。「引き揚げることになり、明日ここを發つて集合場所の連山関へ行きませう」「少しですが、夕食の残り物があります。ここでごろ寝してください」と言つて、部屋へ案内してくれた。お陰で、この日は野宿しないで済んだ。翌朝早く、小寺さんの家を出て、また線路沿いの

道を北へ向かって歩いた。

十二 連山関で日本人会に合流

安東中学の同級生、竹村君は海軍兵学校へ進んだ。たしか、彼のお父さんは連山関小学校の校長先生だったはずである。我々は、迷うことなく竹村家を目指した。引越していたが、竹村家の仮住居はすぐに分かった。お母さんは小さい子供三人を従えて玄関先で我々に応対した。お父さんは、五竜背の八路軍病院に看護婦として徴用されている娘さん二人を迎えに行き、今は留守だということが分かった。「八路軍の徴用先から脱走して来ました。一晚泊めて下さい」と、私は正直にわけを話した。「それは大変、とにかくおあがりなさい。では、この穴蔵がよろしいわ」このお母さんも腹がすわっているな、と思った。台所の床下に、小学生の娘さんが「お握り」を運んでくれた。

翌日、竹村先生は明子さん、ミホ子さんの二人を連れ戻すことに成功して、無事戻って来られた。一夜の宿をお願いしたつもりだったが、ちょうど

そのころ、連山関在住の六百余人余りの日本人は皆、帰国の準備に追われていて、竹村先生は、一緒に行ってもらえれば心丈夫なので、竹村家の家族と同行することを提案された。我々も願ったり叶ったりなので、この引揚団体に同行することとなった。

七月二十八日の夜、小学校の校庭に全員が集合し、六百余人余りを小隊・中隊・大隊に編成した。出発してすぐに、いきなり道なき道の山越えとなった。真つ暗闇の中、各人は相当に重い荷物を背負い、幼子を連れているので、山越えは想像に絶する苦難である。竹村家には三歳の男の子、征夫君がいた。手をひいて登れるような山ではない。この子を背負い、はいつくばって山を登り、次にまたひとつ山を越え、一休みしてはまた山を越え、ようやく平場に出て野宿することになった。きつい山越えだったが、全員が体力以上の力を発揮して、ひとりの落伍者も出さなかった。みんな力が尽きて草原に倒れこみ、そのままの姿勢で眠って

いた。

夜が明けて、盆地を進んでいるときに、丘の上から銃撃を受けた。匪賊の来襲である。みんなには小休止を命じ、できるだけ女、子供を真ん中にして、その周囲を男性が囲うように全員を団子状にまとめた。匪賊は駆け足で近寄って来たが、人数は意外に少なく十人ばかりで、その中で小銃が二挺、隊長格の男がピストルをかざして威張っているだけで、恐いとは思わなかった。腕時計を二、三個、それに万年筆を二、三本かき集めて頭目に渡したら、意外にあっさりと引き揚げて行つた。

十三 日僑俘

中国共産軍と国民党軍との緩衝地帯と思われる草原を突つ切つて、ようやく遼宮線の寒嶺駅にたどり着いた。ここは、ちょうど一年前に動員先から安東へ帰る際、乗車した所で記憶に新しい。駅の近くの広場に集合して、点呼をとつた。一応全員到着しており、お互いに無事を喜んだ。ここで、引揚業務に当たっている機関の何某とかいう日本

人が、台上がって演説をぶつた。「皆さん、もう安心してください。責任をもって乗船地までお連れいたします」とかなんとか話をしたが、久しぶりに実に歯切れの良いあいさつを聞いて、みんなの顔が紅潮した。しかしこの人たちは、人前でも平気で我々難民から金品を奪つたり、夜になると「女を出せ」というような要求を突き付けてきた。こんなことは、中国共産軍の占領下ではなかったことだが、この無法地帯では仕方がないということなのか、みんな恐怖の夜を過ごさなければならなかった。

次の日、うまい具合に本溪湖行きの列車が来たので、全員乗車して宮原へ向かった。宮原には、沿線各地からの避難民が集まっていた。日本人が大勢いるので心丈夫ではあったが、ここでも夜になるとまた「女を出せ」と、しつこい要求が続いた。「女を出せ！」は毎晩続いた。自衛上考え出されたのが、断髪して坊主頭にする事だった。かくして、明子さんもミホ子さんも、黒髪を断ち切

って男装に変わった。

宮原のテント村に三日間いる間に、正式の引揚団体の編成が行われた。その際、既婚者家庭が優先帰国、独身者は後回しということになり、竹村先生は考えた。長女の明子さんと栗和田氏、次女のみほ子さんと私はそれぞれ既に結婚していることにして、帰国手続きの書類に書き込んだのであった。このような形式上の結婚を「下関結婚」と言い、下関に着いたら自然解消するというのだった。次の日、日僑俘第〇〇号と書かれた布切れが各人に交付された。

十四 奉天の難民收容所

奉天（瀋陽）の收容所へは、遼陽經由で移動した。鉄西地区の元鉄工場だった「第五集中営」と呼ばれる難民收容所を割り当てられた。八月三日から約一カ月間、この收容所でお世話になった。

栄養失調に加えて衛生状態が悪いので、コレラや腸チフスが流行った。日に日に衰弱して、多くの子供たちが死んでいった。疑わしい症状の患者

が出ると、出発が一週間ほど遅らされるという話だった。管理者に発見されないうちに、夜中に死んだ子供を埋葬してくれと頼まれ、万世君と二人して穴を掘って遺体を埋めたこともあった。收容所の出入りは結構あって、ある日一つの集団が出て行き、また別の集団が送り込まれてきた。

收容所の中をぶらぶら歩きしていたときに、安中同級生の堅田耕一君と出会った。一別以来のいろいろな出来事を話し合ったが、彼らは正規の手続で安東を離れて来たようだが、それにしても、語り尽くせない苦勞の毎日を過ごしてきたのだった。自分は中国共産軍の徴用から逃れて来て今ここにいる。さて、母や姉たちは今、どこでどうしているのだろうかといつも案じていた。

十五 移送列車

いよいよ引揚乗船地の葫蘆島へ向かうことになり、收容所を出て奉天の北停車場まで歩いた。用意されていた引揚専用列車は、無蓋貨車だった。乗車せよと指令が出たが、地面から計ると三メー

トルもある外枠を乗り越えるのは、女、子供には大変難儀なことだった。一つの貨車には五十人ほどの割り当てで、私たちの貨車には比較的女、子供が多かった。発車しても、途中で意味のない停車をするので時間が長くかかり、なかなか先へ進まなかった。列車は一応葫蘆島へ向かっているのだろうか？ もう少しの所まで来ていても、心配の種は尽きなかった。その心配は、真夜中になつてはつきりした。列車が進行中に、右手の丘の上から射撃された。威嚇射撃いかくしゃげきのようだった。

移送列車は軍事輸送であつて、国府軍の警備兵が乗車した車両も連結されていると聞いていたが、何の役にも立たないようだった。引揚集団の中隊長から伝令に出てくれと頼まれて、私は線路脇を走つて列車の先頭まで行つて見たら、他の集団からも様子を見に来ていた。機関車には、機関手や助手らが三人乗っていたが、「恐くて列車を動かせない」と言うのだった。機関手が、このようなケースでは、金品を差し出すのが中国の長年の習

慣だと言うのだから、あきれて物が言えない。こうしたことは、どの引揚大隊も経験している。何箇所かで銃撃を受けて停車しながら、ようやく夜が明けてきた。

十六 大陸最後の宿

列車は、錦州の収容所が満杯だとのことで、その先の錦西駅の引き込み線に到着した。木造の倉庫が十数棟あつて、その中の比較的大きい棟が割り当てられた。中央部には売店があつて、物資は極めて豊富で、食べるもの、着るもので、ないものは何もないといった状態で、金さえあれば何でも手にすることができるとは、私のポケットにはもう端金しか残つていなかった。ここ錦西から、葫蘆島は目と鼻の先だ。情報では今我々が持つている日本紙幣は、日本上陸後新円に交換しなければならぬが、交換には制限があつて、一人千円と決まっているそうだ。日本は食糧難で、大衆は飢えていると聞く。余分な金は、物に換えて持つて行つた方がよいということだ。「三日前の古新

「聞ころか、一カ月も二カ月前のぼろぼろになった日本の新聞が回し読みされていた。アメリカの占領下にある、祖国日本の実情が断片的ながらに読み取れるのだが、どこまで本当なのかどうかは、この目で確かめるまでは分からないと思っただ。

満州国が虚構であったことは、もう十分納得していたが、一方祖国への思い入れは依然として強く、自尊心も何もかなぐり捨ててここまでやってきた今、どろどろに汚れた敗戦国を想像するのはいやだった。

十七 引揚船

明朝、この収容所を出て乗船すると告げられた夜は、興奮して寝られなかった。幼いころのいろいろな思い出が、次々と浮かんできた。列車は葫蘆島の岸壁近くに着いた。もう引揚船は待機していた。「ジョン・ドックウエラー・V O 17号」という。一万トンの船は大きく見えたが、五千人以上も詰め込まれると、人いきれで出航前から船酔

いの症状が現れてしまった。船倉は蚕棚のように仕切っており、換気も悪く、外海に出ると大半の人は横たわって唸うなってしまった。玄界灘はものすごく荒れて、食事を配って歩いてもみんな食欲がなく、まるで死人のようにぐったりとして横たわっていた。「九州が見えるぞー」の声がしても、甲板に上がった者は少なかった。北九州の山並みが眼界に横たわっている。心地良い海風に吹かれて、立ち尽くしてしまった。博多港の沖合いに停泊したまま、一週間ほど上陸許可が下りなかった。下痢患者が多く、コレラの疑いを持たれて、全員の検便を徹底的にやられた。犬のように四足の姿勢にさせておき、肛門にガラス棒を突っ込んで便を採るのだから、女の人はみんな嫌がった。

上陸の予定を、前の日言い渡された。周辺を見回してみると、たしかに衰弱はしているが、みんな生きていた。ようやく日本にたどり着いたという実感を味わっていた。

昭和二十一年九月二十三日、いよいよ上陸であ

る。船のタラップを一段一段下りて行くときの気持ち、そして岸壁に下り立ったときの感動は、到底言葉では言い表すことができない。母国を慕い続けた者にしか理解できないだろう。

十八 祖国への上陸

引き込み線の松原駅一帯には、三角屋根のバンガロー風の臨時宿泊施設が準備されていた。宿舎に入る前には、まずDDTで全身を消毒された。

夕食に配られた「おむすび」のおいしさは、一生忘れることができない。翌日、衣料品の配給があった。下着からズボン、上着と全部着替えて、実にさっぱりとした気分になった。「もう俺たちは難民ではない」と晴々とした顔つきになって、それぞれ目的地へ向かうことになった。

東京行きの特快列車に、竹村家の家族と一緒に乗車した。夕方、松原駅を発車した列車は北九州をゆっくり東へ向かった。安東で別れたままの母や姉たちはどうしただろうか、散り散りになった家族とは再会できるのだろうか、頭の中は不安で

いっぱいだった。関門海峡を過ぎ、夜中に下関駅を通過したとき、ミホ子さんの方を見ると目が合った。今「下関結婚」は解消されたのだなあ、と思った。彼女もその意味が分かったらしく、頬が緩んだ。あのとき本溪湖で、「これは、あくまでも形式結婚だからね。日本へ引き揚げる方便だからね」と、何回も何回も念を押して私の顔を覗くようにして見ていたお父さんは、そんなこともすっかり忘れて寝入っていた。

十九 戦後を生きる

ともに死線を越えて行動した人たちと別れて、それぞれが戦後の苦難の生活を生きた。

私の場合は、本籍地の福島を訪ねたり、長兄の疎開地で再会できた母や姉たちと共に上京して、渋谷区羽沢町の知人宅に間借りして、あの食糧難の時代を乗り切ったのだった。

アルバイトをしながら大学を出た年に、結核を患って、一年半の間療養所生活も体験したが、前記した中国の八路軍を脱走した際に世話になった

竹村家の三女、かくまわれた穴蔵までお握りを運んでくれた少女が成人して、のちに私の妻となり、女兒を二人育ててくれ、さらに孫も二人できて、今みんな近所で暮らしている。平和の有り難さを人一倍痛感している。将来の平和を希求してやまない次第である。

赤い夕日に思いを沈めて！

千葉県 並木 公子

連日のニュースが過去の歴史問題に絡み、中国、韓国の反日行動に及ぶとき、彼の地で生まれ幼少時を過ごした私の胸は、殊更に痛みます。

父蘆田養蔵は、日清戦争のあった明治二十七年（一八九四）年に秋田県山本郡に生まれ、秋田師範学校を卒業後、数年間秋田市の小学校で教鞭を執っていました。かねてから満州に深い関心を寄せていましたが、以前に渡満していた先輩に誘われるままに、大正の末期に満鉄経営の小学校に転職しました。

私が生まれた大石橋の小学校には、十年近くも勤務していて、校長になりました。校長になってからは異動が頻繁となり、安東（丹東）、奉天（瀋陽）、新京（長春）と矢継ぎ早に移り、その後学校経営が満鉄から離れたのを機に、在満日本大使館